本薬師寺の調査
－第114－3次

倉庫建設に伴う事前調査。調査地は橿原市城殿町に所在し、七条大路と西三坊大路の交差点または本薬師寺の寺域西北隅を限る施設の存在が想定された。

調査区は東西９ｍ、南北６ｍの54㎡の範囲で設定し、調査期間は５月14日～５月18日である。

調査の概要

藤原宮期の遺構は、塀２条、溝２条、掘立柱建物１棟、土坑１基で、ほかに古墳時代の土坑１基と平安時代の溝１条がある。ここでは、藤原宮期の遺構について述べる。

SA430　調査区北端にある掘立柱東西塀。柱間は2.4m（８尺）で、２間分検出した。１基の柱穴に太さ30cm、長さ35cmの柱根が残る。

SA435　SA430の西端に取り付き、南に延びる掘立柱南北塀。２間分検出した。柱間は調査区の範囲内では不確定であるが、2.4mから2.7m（８～９尺）の間で取ることができる。

SB431　西北隅の柱穴を1基検出したのみで、規模等は不明。今回は掘立柱建物として理解したが、直交する掘立柱塀の西北隅である可能性もある。柱抜取穴から須恵器甕が出土した。SA430から2.7m（９尺）、SA435からは4.8m（16尺）の位置にある。

SD433　SA435と重なる位置にある南北溝。幅約2.1mで、深さは約30cm。SA435よりも新しい。本薬師寺周辺のこれまでの調査で検出している西三坊大路東側溝SD105の延長部に当るとも考えられる。

SD434　SD433に連なる東西溝。幅約0.9mで、深さは５～30cm。SD433を越えて、西方に延びる可能性もあるが、削平のため不明。SB431よりも古い。

出土遺物　土器は少なく、整理箱で2箱分である。瓦は軒平瓦6641H型式と、SD433上層の平安時代の南北溝SD436から薬師寺315型式が出土し、ほかに丸瓦が21点（2.13kg）、平瓦が39点（3.45kg）出土した。

成果と今後の課題

今回の調査は小規模なものであったが、掘立柱塀２条、溝２条を検出し、大きな成果をあげることができたと言えよう。このうち、掘立柱塀SA430・SA435はその位置と規模から、本薬師寺の地域を画するある時期の北面大垣、西面大垣である可能性は非常に高い。本薬師寺の大垣を検出したのは初めての例で、本薬師寺の研究の上で貴重な資料を提供した。

また、南北溝SD433はこれまでの調査で検出している西三坊大路東側溝SD105にあたる可能性もあるが、既調査区とは南北距離がかなり離れており、その性格の比定にはなお慎重を要する。仮にSD105の北延長にあたる溝であったとすれば、西面大垣SA435と並存はしえない。SA430・SA435が天武朝創建時の大垣で、後に位置をずらして条坊を施工したのか、あるいはSD433が条坊側溝であるかどうかの可能性も含めて、今後より一層の検討を加える必要がある。

（玉田芳英／文化庁記念物課）

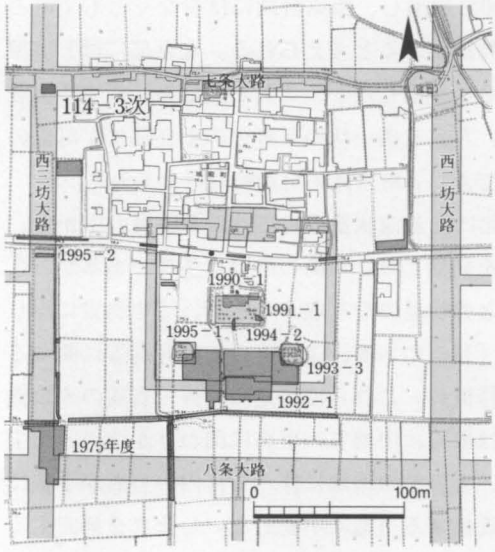

図73　調査区位置図

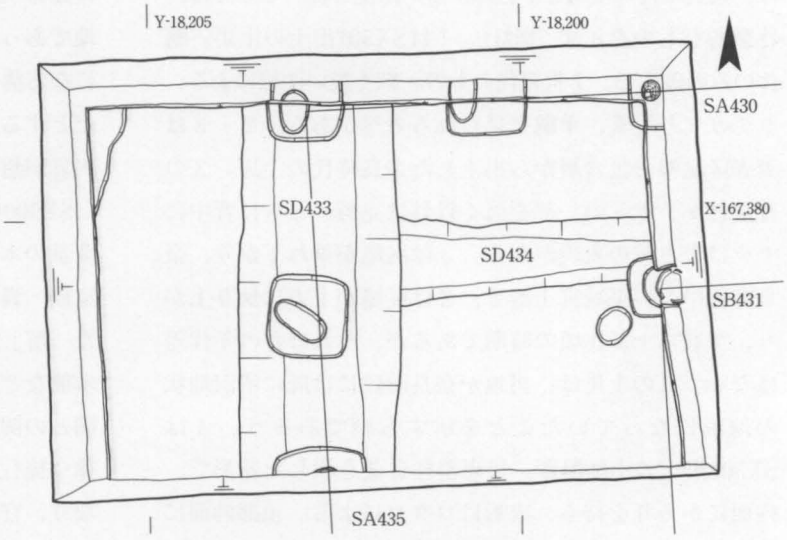

図74　第114－3次調査遺構平面図　1：100